プロジェクトの沿革

1　2010 - 2011 年度のプロジェクトの組織

2010 - 2011 年度は 5 つの研究グループにて活動を行った。各研究グループの構成については以下に、日本人･外国人の順で、それぞれ五十音順およびアルファベット順に列挙する。なお、＊はコアメンバーで、所属は 2011 年度当時のものである。

【プロジェクトリーダー】

長田　　俊樹　　総合地球環境学研究所・教授（言語学）

【古環境研究グループ】

岡村　眞　　高知大学教育研究部自然科学系・教授（地学）
奥野　淳一　　国立極地研究所・特任研究員（地震学）
熊原　康博　　群馬大学教育学部・講師（自然地理学）
久米　崇　　総合地球環境学研究所・特任准教授（土壌水文学）
竹内　望　　千葉大学大学院理学研究科・准教授（雪氷生物学）
堤　浩之　　京都大学大学院理学研究科・准教授（地球物理学）
長友　恒人　　奈良教育大学教育学部・教授（年代測定学）
中野　孝教　　総合地球環境学研究所・教授（資源環境地質学）
前杢　英明 *　　広島大学大学院教育学研究科・教授（自然地理学）
松岡　裕美　　高知大学理学部災害科学講座・准教授（地質学）
宮内　崇裕　　千葉大学大学院理学研究科・教授（地形学）
八木　浩司　　山形大学地域教育文化学部・教授（変形地形学）
横山　祐典　　東京大学海洋研究所・准教授（気候変動学）※ 2011 年度除外

【生業研究グループ】

宇田津　徹朗　　宮崎大学農学部附属農業博物館・准教授（農学）
大田　正次 *　　福井県立大学生物資源学部・教授（農学）
河瀬　眞琴　　農業生物資源研究所・研究主幹兼基盤研究領域ジーンバンク長（農学）
木村　李花子　　馬事文化研究所・所長（生物学）
小坂　康之　　総合地球環境学研究所・プロジェクト研究員（民族植物学）
佐藤　洋一郎　　総合地球環境学研究所・教授（植物遺伝資源学）
千葉　一　　東北学院大学・非常勤講師（経済学）
藤本　武　　人間環境大学人間環境学部・准教授（文化人類学）
三浦　励一　　京都大学大学院農学研究科・講師（農学）
森　直樹　　神戸大学大学院農学研究科・准教授（植物遺伝学）
湯本　貴和　　総合地球環境学研究所・教授（生態学）
P.P. Joglekar　　デカン大学考古学科・准教授（動物考古学）
A.K. Pokharia　　ビルバル・サハニ古植物学研究所・准教授（植物考古学）
S. Weber　　ワシントン州立大学・准教授（DNA 考古学）

【物質文化研究グループ】

上杉　彰紀	総合地球環境学研究所・プロジェクト研究員（考古学）
宇野　隆夫 *	国際日本文化研究センター・教授（考古学）
遠藤　仁	総合地球環境学研究所・プロジェクト研究員（考古学）
小磯　学	神戸夙川学院大学観光文化学部・准教授（考古学）
酒井　英男	富山大学大学院理工学研究部・教授（地球科学）
丹野　研一	山口大学農学部・助教（考古学）
寺村　裕史	総合地球環境学研究所・プロジェクト研究員（考古学）
山口　欧志	国際日本文化研究センター・機関研究員（考古学）
P. Ajithprasad	マハーラージャ・サヤジラーオ大学・教授（考古学）
J.M. Kenoyer	ウィスコンシン大学人類学部・教授（考古学）
J.S. Kharakwal*	ラージャスターン・ヴィディヤピード大学・准教授（考古学）
Q.H. Mallah*	シャー・アブドゥル・ラティーフ大学・教授（考古学）
F. Masih*	パンジャーブ大学考古学科・教授（考古学）
V.S. Shinde*	デカン大学考古学科・教授（考古学）

【伝承文化研究グループ】

永ノ尾　信悟	東京大学東洋文化研究所・教授（インド学）
大西　正幸 *	総合地球環境学研究所・プロジェクト上級研究員（言語学）
北田　信	大阪大学世界言語研究センター・講師（言語学）
児玉　望	熊本大学文学部・准教授（言語学）
後藤　敏文 *	東北大学大学院文学研究科・教授（インド学）
高橋　孝信	東京大学大学院人文社会系研究科・教授（インド学）
高橋　慶治	愛知県立大学外国語学部・教授（言語学）
堂山　英次郎	大阪大学大学院文学研究科（インド学）
外川　昌彦	広島大学大学院国際協力研究科・准教授（文化人類学）
藤井　正人	京都大学人文科学研究所・教授（インド学）
前川　和也	国士舘大学 21 世紀アジア学部・教授（西アジア史）
松井　健	東京大学東洋文化研究所・教授（文化人類学）
森　若葉	総合地球環境学研究所・プロジェクト上級研究員（言語学）
A. Parpola	ヘルシンキ大学・名誉教授（インド学）
M. Witzel	ハーバード大学・教授（インド学）

【DNA 研究グループ】

植田　信太郎	東京大学大学院理学系研究科・教授（生物科学）
神澤　秀明	総合研究大学院大学生命科学研究科・大学院生（遺伝学）
斎藤　成也 *	国立遺伝学研究所・教授（遺伝学）

【プロジェクトメンバー外協力者】

大島　智靖	京都大学人文科学研究所・非常勤講師（インド学）

下岡　順直	金沢大学環日本海域環境研究センター・連携研究員（年代測定学）
中内　惇夫	岐阜大学応用生物科学学部・大学院生（土壌水文学）
中村　淳路	東京大学理学部・学生（地球化学）
西村　直子	東北大学大学院文学研究科・専門研究員（インド学）
三宅　尚	高知大学教育研究部自然科学系・教授（植物学）
山田　智輝	東北大学大学院文学研究科・大学院生（インド学）
V. Dangi	マハーリシ・ダヤーナンド大学・大学院生（考古学）

2　2010 - 2011 年度のプロジェクトの活動

A　全体の活動

A-1　2010 年度

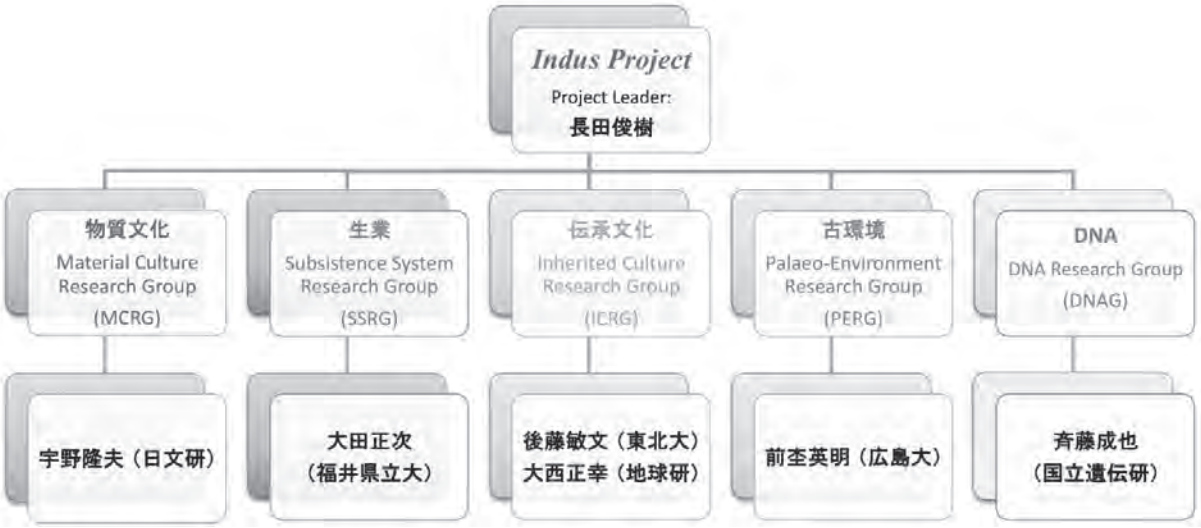
まず、インダス・プロジェクトの全体活動報告をおこなう前に、インダス・プロジェクトの研究組織をもう一度おさらいしておこう。われわれはプロジェクトの研究を進めるために、以下の研究グループにわかれて、研究活動をおこなっている。

1）古環境研究グループ（Palaeo-Environment Research Group=PERG）
2）物質文化研究グループ（Material Culture Research Group=MCRG）
3）生業システム研究グループ（Subsistence System Research Group=SSRG）
4）DNA 分析研究グループ（DNA Analysis Research Group=DARG）
5）伝承文化研究グループ（Inherited Culture Research Group=ICRG）

それぞれのグループにはコアメンバーがいる。そのうち、日本側メンバーのお名前だけをあげておく。（1）は前杢英明・広島大学大学院教育学研究科教授、（2）宇野隆夫・国際日本文化研究センター教授、（3）大田正次・福井県立大学生物資源学部教授、（4）斎藤成也・国立遺伝学研究所教授、（5）後藤敏文・東北大学大学院文学研究科教授である。このうち、（4）については、2008 年度のファルマーナー遺跡で人骨が出土したので、その DNA 分析のために、2009 年度からたちあげたものである。また（5）はさらにインド学グループと言語学グループに分かれ、前者の代表が後藤教授で、後者の代表としてコアメンバーに入っているのが大西正幸・総合地球環境学研究所プロジェクト上級研究員である。それぞれのグループの活動報告については、例年のように、これらのコアメンバーによっておこなわれる。ここではそれぞれのグループの活動以外のインダス・プロジェクト全体にかかわるような出来事を中心に報告する。

2010 年度、2011 年度は本当に海外出張が多かった。プロジェクトの成果を発表するということが重要だったので、致し方ない部分がある。しかし、プロジェクトとは関係ない、自分の研究であるムンダに関連するシンポジウムもあって、いずれも発表をまとめるのが大変だった。この二年間はほとんど動き続けていたので、ここで忘れないうちに、まとめておきたい。

2010 年度からはじめる。まず 4 月に宇野さん、寺村さんと一緒に、ウダイプルに行った。カーンメール遺跡の報告書作成のための打ち合わせが主な任務である。このとき、私の荷物がデリーに着かず、モルジブのマーレに着いたために、マーレからカバンの鍵を送れと言われたために、



プロジェクトのコンセプト

送らない、送れのやりとりで、いろいろと大変だった。最終的には私の帰国便で荷物も日本に戻った。

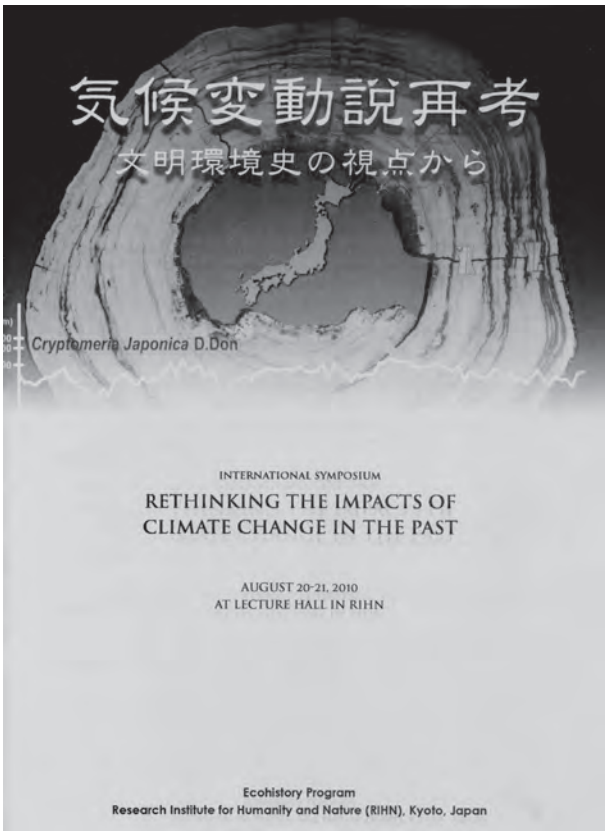
5 月には幕張メッセで行われた「日本地球惑星科学連合 2010 年大会」にセッションを立てて参加した。理系の学会としてはかなり大きな学会である。古環境研究グループの皆さんのうち、前杢さん、宮内さん、熊原さん、中村さんらが研究発表をして、私はインダス・プロジェクトの概要を話した。これは全くの余談だが、このとき、自分のコンピュータを部屋に置き忘れた。あんな大きなコンピュータを忘れるなんて、年を取りたくはない。

7 月には、ウィーンで行われた南アジア考古学会に参加した。カーンメール遺跡の発掘報告をカラクワルさんが行い、ファルマーナー遺跡の発掘報告をシンデさんが行った。この考古学会に参加し、こうした研究はやはり植民地の遺産なのだと改めて感じた。つまり、南アジアの考古遺産に関心があるインド人やパキスタン人などについて言えば、ヨーロッパで行われる学会に参加できる人が財政上どうしても限られているし、植民地的関心を引き継ぐヨーロッパ人は、インドではヨーロッパ人に課する許認可に翻弄され、パキスタンでは昨今の政治状況の難しさから敬遠してしまったので、かなりの低調である。インダス文明に関してはケンブリッジ大学のオールチン亡き後、またポーセル（今年の 9 月には亡くなった。ご冥福をお祈りする）も大学から定年退職してしまい、この学会に参加していなかったので、ケノイヤーの独壇場だった。ケノイヤーの発表にはだれも質問を浴びせなかったので、今やキング・オブ・インダス・スタディーに弓矢をいる人はいなくなったねとケノイヤーに皮肉を言ったところ、You are always polemic と言われた。いずれにせよ、インダス文明研究は次の世代、だれが旗を振ってやるのか、今ここで曲がり角にきたと言えるだろう。

この学会でシンデさんに久しぶりにあった。前年の 12 月に、長田にはなんの相談もなく、自分勝手に本を出版してしまった。これには本当に驚いた。インターネット検索ではじめて自分の本が出ていることを知る。後にも先にもない冗談のような話だが、本当の話である。そこで、ウィーンでシンデさんを捕まえて、これはおかしい、倫理に反すると話しだすと、こういった。長田の名前を出さずに出版すればよかったのか。そういう問題ではないことは誰にでもわ

かるはずだが、こう返事されてしまうと怒ることも忘れて、あきれてしまった。シンデさんは何でも要求してくる、アグレッシブなインド人とはことなり、人当たりはソフトだ。ところが、こうした行為はやってしまっても何とかなるとタカをくくっているようにしかみえない。今後、シンデさんと付き合うなとは言わないが、こうした事実があったことは知っておいたほうがいいと思い、ここに書いておく。

8月には国際シンポジウムが続いた。まず、文明環境史のシンポジウムが行われた。そのプログラムを紹介しておこう。



文明環境史プログラム国際シンポジウムのポスター

文明環境史プログラム主催国際シンポジウム『気候変動説再考：文明環境史の視点から』

2010 年 8 月 20 日（金）

13:00-13:10　立本成文・開会挨拶

13:10-13:20　佐藤洋一郎・趣旨説明

13:20-14:05　Lauren Ristvet “The Mesopotamian Response to Climate Change: Collapse as Adaptation”

14:05-15:50　Steven Weber “Diet and Climatic Shifts: Their Interrelationship During the Indus Civilization”

15:50-15:35　Marco Madella “The Importance of Small Scale Approach to Understand Environmental Change, Landscape and Resource Exploitation: The Example of Holocene North Gujarat (India)”

15:50-16:35　Anil Pokharia “Changing agricultural strategies in relation to social and environmental changes at Harappan Kanmer, Kachchh, Gujarat”.

文明環境史プログラム国際シンポジウムの様子

16:35-17:20　Peter Jordan “Investigating the interplay between climate change and culture-history among hunter-gatherer societies at the Pleistocene/Holocene transition in Northern Eurasia”

2010 年 8 月 21 日（土）

9:30-10:15　中塚武 “Challenge of High-Resolution Paleoclimatology: its Potential Impacts for Under standing of Relationships between Climate and Societies”

10:15-11:00　羽生淳子 “Climate Change, Subsistence Intensification, and Human Impacts on the Jomon Landscape”.

11:00-11:45　高宮広土 “Environment and Socio-Cultural Changes in the Prehistory of Okinawa”

このシンポジウムに海外から参加された人はほとんど地球研に客員で来られていた方々だ。われわれのプロジェクトにはウェーバーさんとポカリアさんが客員で来ておられた。最初、エール大学のハーヴェイ・ワイスさんを呼ぶ予定だった。というのも、考古学者なのに、気候変動を重視する立場なので、ぜひお話を聞きたかった。ワイスさんは忙しいと言うことで、お弟子さんのリスベットさんを推薦された。

このプログラムの国際シンポジウムの翌日、8 月 22 日は第 2 回文明環境史プログラム公開シンポジウムが『未来への提言：石油高騰時代の暮らし』と題して、京都文化博物館・別館で行われた。趣旨は「日本は技術大国。今まで、たいがいの問題は技術開発で乗り切ってきた。少なくともそう思っている国民は多い。では、石油の価格が高騰すればどうなるか。今までとは一味も二味も違う技術開発が必要だ。でもそれだけでは足りない。国民一人ひとりが、生きがい・生き方を根本から考えなければならない時代が来ようとしている。地球研の研究者たちが、異色の宗教学者山折哲雄を交えて語る未来社会！」というもので、以下にプログラムを紹介しておこう。

第 2 回文明環境史プログラム公開シンポジウムが『未来への提言：石油高騰時代の暮らし』

2010 年 8 月 22 日

13:00　開場

13:30-13:40　開会の挨拶・趣旨説明
長田俊樹（総合地球環境学研究所・教授）

13:40-14:40　基調講演「石油高騰時代をいかに生きるか－宗教学者から未来への提言」
山折哲雄（宗教学者）

14:40-15:00　問題提起 1
間藤 徹（京都大学大学院農学研究科・教授）

15:00-15:20　問題提起 2
縄田浩志（総合地球環境学研究所・准教授）

15:20-15:35　休憩

15:35-16:25　パネルディスカッション
山折哲雄・間藤 徹・佐藤洋一郎・縄田浩志（司会：長田俊樹）

16:25-16:30　閉会の挨拶
佐藤洋一郎（総合地球環境学研究所副所長・教授）

じつは、私の日文研助手採用での面接試験の試験官のお一人が山折さんだ。日文研在任中も、山折さんの『日本人はどのようにしてキリスト教を受容したか』という共同研究の幹事を務めた間柄なので、よく存じ上げていて今回の発表をお願いした。2005 年 2 月 5 日に東北大学開学百周年記念事業の一環で『宗教の諸相：多神教と一神教』というシンポジウムに山折さんをお招きするにあたり、後藤さんに頼まれて仲介したこともある。今回も、私が山折さんに直接電話でお願いしたところ、快く参加してくださることになって実現した。山折さんの講演は本当にうまい。昔を知る人はあまりうまくなかったのだが、場数を踏むにつれてうまくなっていったと聞く。山折さんの講演を楽しみにされる方々も多く、会場はほぼ満員だった。

8 月 27 日と 28 日は発掘報告会と銘打って、シンポジウムが開催された。そのプログラムを紹介しておこう。

2010 年度インダス・プロジェクト発掘報告会

2010 年 8 月 27 日 (金)

13:00-13:15　長田俊樹「インダス・プロジェクトの概要および発掘報告会の趣旨」

13:15-14:15　J. Mark Kenoyer (Wisconsin Univ.) “Ongoing documentation at Harappa and salvage excavation in 2010”

14:15-15:15　Qasid H. Mallah (Shah Abudul Latif Univ.) “Excavation project at Lakhan-jo-daro, Sind, Pakistan”

15:30-16:30　Jeewan Singh Kharakwal (Rajasthan Vidyapith) “Excavation at Kanmer”

16:30-17:30　P. Ajithprasad (Maharaja Sayajirao Univ.) “Excavations at Shikarpur, Gujarat 2008-2010: An update”

2010 年 8 月 28 日 (土)

9:30-10:30　Marco Madella “A report on the North Gujarat Archaeological Project”

10:30-11:30　Radall Law “Harappan rock and mineral trade networks: New insights from geological province analyses”

11:30-12:00　Hirofumi Teramura and Takao Uno “Intrasite spatial analysis at Kanmer –tentative report”

13:00-14:00　Akinori Uesugi and Hitoshi Endo “Documentation and analysis on artefacts from Kanmer and Farmana”

文明環境史プログラム公開シンポジウムの様子

14:00-15:00　Anil Pokharia “Present scenario and future prospects of Archaeobotanical studies in India”
15:00-16:30　Discussion

インダス文明遺跡の発掘報告が日本で行われるというのは画期的なことだ。このプロジェクトでしかできなかったことである。いささか自己宣伝めくが、これはプロジェクトの成果なので強調しておきたい。

2010 年度の報告会ではケノイヤーさんの学生でランデル・ローが発表を行った。ランディーは彼の膨大な博士論文をプロジェクトの出版物として発刊することに同意してくれたので、8 月の一ヶ月、地球研に滞在してまとめあげた。その本が 2010 年度末には出版されたが、この場でランディーと出版を許してくれた、彼の師匠であるケノイヤーさん、そして本にするにあたって編集を受け持った上杉さんに感謝の意を表したい。

9 月の前半は大西さんに誘われて、デリーで行われたチョトロに参加した。チョトロとは先住民ビールの言語でお祭りを意味し、先住民の言語や文学、文化に関心のある人が集まる会議である。ガネーシュ・デーヴィという英文学を専門とする人が創設した Bhasha Research and Publications Centre を中心に毎年行われ、今年は先住民性をテーマに行われた。この会議には、ヨーロッパ人がたくさん参加していたが、彼らの多くは英国連邦文学を専攻する人たちだ。インドには遊び半分できている人が多く、彼らのインドに対する反応は大変勉強になった。オリエンタリズムの源泉をみるような気がした。この会議は最初の二日がデリーで、そこでは大学生や院生が多く参加していたが、そのなかにはベンガル人が多かった。私の発表はそこで行われたが、全くの反応がなく、知ったかぶりのベンガル人（大西さん、ベンガル人批判ですみません）が発表とは関係ないことに食らいついてきた。まあ、場違いなところで、場違いな発表をしてしまった私がバカだった。

後の三日間はシムラから 20 キロばかり先のホテルで開かれた。これは全くの設定ミスだ。ヒマーチャル・プラデーシュで行うのだから、そこの文化紹介や踊りがあってしかるべきだが、

発掘報告会参加メンバー

そういうものが一切なかった。また、一泊一万円するような人里離れた高級ホテルでやる会議に、テーマが先住民性ですから、チャンチャラおかしい。もっとも、主催者のガネーシュ・デーヴィさんは何でもありの世界を作り出し、欧米から寄付金を集めて Tribal Academy を運営していて、お金を使って何かをする人はやはり敵を作っては行けないのだと言うことを教えてくれたようで、それはそれで勉強になった。なお、デリーで大西さんが鉄製の門に頭をぶつけ何針にも縫う大けがをした。インドにしては、手当が早く大事にいたらなくてよかったが、インドではどこにどんな落とし穴があるかわからない。

9 月の後半はアジットさんと、グジャラート州のインダス文明遺跡を踏査した。いずれも、ブジに泊まったが、アジットさんは安いホテルを探し、一度はインド考古局（ASI）のブジ事務所に泊まった。事務所とは名ばかりで、ブジに赴任した ASI の役人の自宅になっていて、地面にごろ寝だった。別にお金は払うので、ちゃんとしたホテルに泊まりましょうと言ってもなかなか許してくれなかった。さすがアジットさんである。カッチのインダス遺跡巡りについて言えば、雨季あけのこの時期に行くと、かなりイメージが違う。全てが草で埋め尽くされる感じで、ほとんど遺跡かどうかわからない状態である。Juni Kuran 遺跡は昔カラクワルさんと行ったときはほとんど砂漠のようなところにあるイメージだったが、とんでもない。今回は緑に覆われていて印象が変わってびっくりした。乾季の遺跡だけでインダス文明観を考えてはいけないと言うことである。これも勉強になった。

閑話休題。インドはどこへ行っても新しい発見がある。それが癖になってなかなか辞められない。報告書とは離れるが、この 2011 年 9 月にインドで出会った出来事を書いておこう。インドに関わるものとして、インドの現状を知ることは重要だから。

まず、バローダでの出来事。アジットさんが連れて行ってくれた Mainland China という中国料理屋さんでは、中国人が 6 人ぐらい飯を食っていて、小生が入っていくとじろじろと見られた。どこの人かと思ったのだろう。みんなでじろじろと見てくるので、ちょっぴり恥ずかしくなってしまった。それが中国流のやり方なのだろう。そこでかかっていたのがなんと山口百恵の歌（といってもメロディーだけ）だった。その曲が中国でもはやったからなのか、それとも日本と中国を混同しているのか、その辺はよくわからない。

つぎに、バローダからデリーに着いたときの出来事だ。空港内でリムジンバスが突然急ブレーキをかけ、何人かが倒れる騒ぎが起こった。空港内ぐらい安全運転せいよ、と思わず叫びそうになったが、いつ事故が起きてもおかしくない。デリーで 10 月に行われることになっている英国連邦スポーツ大会の準備が全くできず、選手村の警備も問題で、何かがおこるのではないか、皆さん気に病んでいる。今だから言えるが、実際にはとくに何も起きなかった。マノハル出版社のご主人の話によると、スポーツ大会の運営を有力な企業にせず、別の企業にして、うまくいくはずがないという。ご主人が「だから、バグワーン（神様）も怒って、雨を降らせているのだ」と、神様をダシにして批判するのがいかにもインド的だ。実際、この年の雨はそれほど多かった。

最後はデリーでの出来事だ。9 月 23 日はデリーで発達しつづけるメトロで、グルガオンに行ってきた。グルガオンはインドとは思えないようなビルが建ち並ぶ。デリーの中心地からはちょうど一時間ほどかかる。そのメトロに乗ってびっくりしたのはその込みようだ。グルガオンまで、ほとんど満席で、まるで日本の通勤電車並みだ。メトロは韓国企業と日本の ODA でできただけあって、乗り心地は最高だ。この新しいグルガオンから、古いバザールにある古本屋に

行ったのだが、古いバザールはこの新しいグルガオンとは好対照に、昔さながらの風景だ。ただし、店によっては、モダンな作りにしている。時代の波もそこまで来ている。

その古本屋の帰り、古い町からメトロの通る新市街まで、バスに乗ったところ、ある事件を目撃した。インドのバスには女性専用席がもうけてあり、ルールを守らないインド人もそこはみんな女性に席を譲るのだが、男だけが乗っていたところに、女性が一人の乗り込んできたときに事件が起こった。女性席が二カ所にあったのだが、それぞれの席の男同士が「お前が譲れ」とお互いが言いだして喧嘩になり、一方がもう一人を殴るという行為に出た。困ったのは乗り込んできた女性だ。私は立つので、喧嘩は止めてと訴える有様。結局、二人とも立たず、そのそばにいた別の男性が立ち、女性も座り、ことは収まった。

以上、インドでこのときに実際に出会った出来事を書いた。こうした風景が特別ではなく、ごく普通にみられるところがインドの怖さであり、おもしろさである。そう思って、ここに紹介した。

インドから帰国後、一週間もしない 10 月 1 日には、アメリカへ出発。ハーバード大学のヴィッツェルさんが主催するラウンドテーブルと比較神話学のシンポジウムに出た。ラウンドテーブルではインダス・プロジェクトの概要を紹介したが、比較神話学の方はムンダの創世神話の話をした。前者ではハラッパー遺跡の発掘責任者の一人リチャード・メドゥさんも発表された。私の発表にメドゥさんが好意的なコメントを寄せてくれた。プロジェクトでやっていることが非常に学際的で成功しているというものだった。お世辞とはいえ、誉められると悪い気はしない。はるばるアメリカ東海岸のボストンまで来た甲斐がある。

11 月にはプロジェクト全体会議が行われた。そのときのプログラムは以下の通り。

2010 年度インダス・プロジェクト全体会議

2010 年 11 月 6 日（土）

13:30　長田俊樹；挨拶、インダス・プロジェクト発表会スライド紹介
14:00　前杢英明：古環境研究グループ 2009-2010 研究報告
15:00　宇野隆夫：物質文化研究グループ 2009-2010 研究報告
16:00　大田正次：生業研究グループ 2009-2010 研究報告
　　森直樹・千葉一：エンマーコムギとインド矮性コムギ、分子遺伝学と儀礼食

2010 年 11 月 7 日（日）

10:00　伝承文化研究グループ 2009-2010 研究報告
　　大西正幸：伝承文化研究グループ・言語学研究班概要
　　後藤敏文：伝承文化研究グループ・インド学研究班概要
　　大島智靖：ヴェーダ，サンスクリット文献における牛
　　山田智輝：『リグヴェーダ』サラスヴァティー讃歌一篇、讃歌二篇
11:00　斎藤成也：DNA 研究グループ 2009-2010 研究報告
　　神澤秀明：古代 DNA の実験報告

12 月は毎年恒例のプロジェクト発表会がある。その 1 週間前に、突然膝が腫れ上がり、歩けなくなり、熱も高熱が出たため入院することになった。そのため、プロジェクト発表会には

参加できず、大西さんに発表をお願いした。大西さんには大変ご迷惑をおかけした。この場を借りて御礼を申し上げたい。

2 月には評価委員会があった。評価委員会での雰囲気もよかったし、評価委員会の評価結果も非常によかった。唯一問題があるとしたら、日本語の本を出版するようにという提案がなされたぐらいだ。このまま今年の評価委員会まで突き進みたいものである。

評価委員会の翌日は文明環境史のシンポジウムがあった。一応、私が 12 月の発表会に出席できなかったので、その代わりにここで発表をという佐藤プログラム主幹の配慮だったが、実質的には参加者も少なく、評価委員のベルウッドさんと井川史子さんのために開催されたようなものだった。そのプログラムは以下の通り。

The 3rd Ecohistory Program Symposium:
The Ecohistory of Yellow Belt and Green Belt in the Afro-Eurasia

2011 年 2 月 21 日（月）

10:00-10:10	Narifumi Tachimoto “Opening speech”
10:10-10:20	Yo-Ichiro Sato “Introduction”
10:20-11:00	Toshiki Osada “The border, between Green belt and Yellow belt- in the case of Indus Civilization”
11:00-11:40	Tsuneo Nakajima “Fish and Human in Marshy and Shoreline Ecotone”
13:00-13:40	Jumpei Kubota “Climate change and human activities in Central Asia”
13:40-14:20	Hiroshi Nawata “Eco-history of keystone species and ecotone resources in the drylands of the Middle East: Working hypothesis of the RIHN “Arab Subsistence” project”
14:20-15:00	Leo Aoi Hosoya and Yo-Ichiro SATO “How was Yellow Belt Formed? - The case study of Xiaohe Tomb site (1,600-1,000BC), Xinjiang-”
15:00-15:15	Coffee break
15:15-16:15	Comments (Peter Bellwood, Fumiko Ikawa, Junko Habu and Itsuki Handoh)
16:15-17:15	Discussion

3 月はアメリカ地球物理学連合（AGU）のチャップマン会議に出席した。3 月 11 日の地震の直後で、どうしようかと相談したが、結局、出席予定の皆さんが行くことにした。このチャップマン会議は AGU の特別セッションで、テーマが決まっている。今回は Climates, Past Landscapes and Civilizations というタイトルで、ニューメキシコ州のサンタ・フェで行われた。今回のオルガナイザーの一人がドリアン・フラーで、ドリアンからぜひ出席するようにと勧められた。この会議に出席したプロジェクト・メンバーとその発表タイトルを書いておこう。

AGU Chapman Conference on Climates, Past Landscapes, and Civilizations

2011 年 3 月 21 日～ 25 日

口頭発表：

長田 “Environmental changes and the Indus civilization: a report on the major outcome of our RIHN project 2007-2011”

中村・横山・前杢・八木・岡村・松岡・三宅・長田・寺村・山田・Adhikari・Dangol・松

崎 “Mid-Late Holocene Asian monsoon reconstruction using a sediment core obtained from Lake Rara, western Nepal.”

ポスター発表：

前杢・下岡・長友・八木 “Was the Ghaggar River mighty Saraswati during Mature Harappan period”

宮内・前杢・松岡・長田・Kharakwal “Late Holocene geomorphic coastal changes affecting the mutation of bay-facing Harappan sites of the Indus civilization, Gujarat, India.”

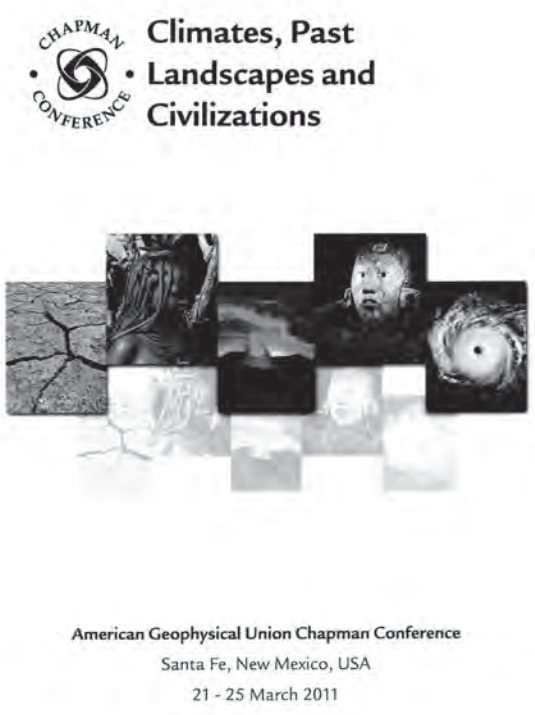
三宅・桃原・中村・岡村・松岡・八木・Dangol・長田 “Vegetation changes since the middle Holocene around Lake Rara, western Nepal.”

奥野・前杢 “The role of hydro-isostasy for Holocene sea-level changes and coastal evolution in the southern Indus region, Gujarat, India.”

AGU に参加してよかったのは、古代文明に取り組む研究者のすそ野が広いことを実感できたことである。とくに、インダス関係の発表が多かった。この会議の中心的な主催者である、英国アバディーン大学のピーター・クリフ教授はパキスタン側でいわゆる「サラスヴァティー川」問題に取り組む土壌学者である。また、前述したケンブリッジのプロジェクトに参加して、ガッガル川流域でボーリングをやったグプタさんも会議では司会を務めておられた。あと考古学者の参加もあった。ハーバード大学のメドゥさんとニューヨーク州立大学のリタ・ライトさんがそれぞれ発表された。また、インダスに関連した発表をしたわけではないが、レンメンさんというドイツ人も、インダス文明に関する調査をやりたいと相談を受けた。

ピーター・クリフのプロジェクトで実際にコアを取っているのがウッズホール海洋研究所の Liviu Giosan（ルーマニア出身でどう名前を呼ぶのかわからない）さんである。彼にこのパキスタンの政治状況ではなかなかボーリングなどできないでしょうと聞いてみると、そうでもないらしい。グーグルアースでコアを取る場所を決めてパキスタンに行き、ヘリコプターをチャーターして現場に行ってコアを取る。そして、帰ってくるので、コアを取る調査は二、三日あれば十分なんだそうだ。これには本当に驚かされた。クリフは気候変動エヴェントがあってインダス文明が滅んだというシナリオをなんとか証明したいようだが、土壌分析からはそういう結果は出てこないようだ。プロジェクトに考古学者がいないのが気がかりである。

年度末、アメリカから帰ってきて、４月早々にヨーロッパに行ったので、バタバタとしてしまった。2010 年度をもって、プロジェクト研究員の上杉さんと寺村さん、研究支援員の園田さん、そして事務担当の河



AGU チャップマン会議

村さんが辞めていかれた。皆さん、どうもありがとうございました。皆さんのご協力ご支援なしではプロジェクトが成り立たなかった。ここでぜひそのことを改めて述べさせていただく。

A-2　2011 年度

そして、最終年度を迎えた。事務担当には長谷さんが戻ってこられ、遠藤さんを支援員からプロジェクト研究員として採用し新体制となった。なお、科研の間接経費が人件費として使えなくなったので、科研で雇っていた平山さんをプロジェクトで雇うことになった。

2011 年も引き続き、海外出張が続いた。まず 4 月には、ウィーンで行われたヨーロッパ地球科学連合（EGU）の年次大会に参加した。今回もまた前杢さんと一緒だった。私は口頭発表を行ったが、前杢さんはポスター発表だった。ここで、前に地球研にいた、沖さん、鼎さんのお弟子さんに会った。昔、鼎さんにも言われたことだが、過去でも川の流量を計算してモデルを立てることができるので、インダス文明期にどのように川が流れていたかのシミュレーションをやってもいいですよとの申し出があった。しかし、後一年しかプロジェクトがないので、せっかくの申し出を生かすことができなかった。

4 月末には再びウダイプルに行き、カーンメール報告書の進み具合を寺村さんと詰めた。そんなに行く必要があるのかと思う方もいるかもしれないが、こうした熱意と誠意がなければインドとの共同研究はうまくいかない。予算が許すならば、会いに行った方がよい。これがプロジェクトをやった人間の率直な感想である。

6 月末には科研費でインドのラーンチーにいった。大西さんと一緒だった。昔の知り合いに多く会って、ジャールカンドは第二の故郷だと実感した。帰国後すぐの 7 月にはオーストロアジア語族の研究会があり、言語学に引き戻される日々だった。

7 月 18 日には大英博物館に行ったあと、スイスのベルンで開催された国際第四紀学連合（INQUA）に参加し、ポスター発表をおこなった。大英博物館は 1985 年に行ったことがあったが、インダス・プロジェクトがはじまってから行ったことがない。そのときの感想を述べておこう。

ご存じのように、大英博物館には世界各地から集められたコレクションが展示されている。とくに、古代文明のコレクションは大英博物館が自他共に認める世界一の規模をほこる。その大英博物館に、インダス文明関連の展示物がどれほどあるか、ご存じだろうか。

行ったことがある方でも、すぐに即答できない。それほど少ない。その展示物は南アジアと東南アジアのヒンドゥー教や仏教関連の展示物フロアーにある。フロアーには全部で 55 のショーケースに飾られている。そのうち、たった一つのショーケースの、さらに四分の一ほどのスペースだけがインダス文明関連の展示物だ。インダス印章が 7 個、押印されたものと並べられている。それと四角形の錘が大小取り合わせて 8 個、女神像が 2 体、首飾り用のカーネリアンが 2 個、ハラッパー式土器とよばれる、葉文様のついたものの破片が一つ、大きなホラ貝が一つ、そして石刃が 3 枚、以上がインダス文明関連の展示物すべてである。

一方、エジプト文明やメソポタミア文明はというと、ショーケースレベルではない。フロアー全体を展示に使っている。中国文明についても、玉の歴史などを入れれば、かなりのスペースが割かれている。また、南北アメリカのマヤ文明やアズテカ文明なども、エジプトやメソポタミアと比べると小さいものの、インダス文明に比べるとはるかに充実している。大英博物館はいわば西洋人の標準的古代文明観を代表している。つまり、西洋人にとっては、インダス文明

大英博物館のインダス文明関連の展示（写真提供：遠藤仁）

がさして重要ではないことを図らずも露呈している。むろん、よく言われるように、大英帝国の侵略と略奪が展示物の多寡と関連をもっている事情もある。しかし、大英博物館は教育機関としての役割にも力を入れている。インダス文明への関心が深まれば、当然、展示や解説の充実に努めるはずなのである。

8 月にはインダス・プロジェクトの最後の国際シンポジウムを開催した。

2011 年度インダス・プロジェクト発掘報告会

2011 年 8 月 7 日（日）

13:00-13:45　Steven A. Weber “An archaebotanical Study in the Indus Civilization ”

13:45-14:30　Nilofer Shaikh “Significance of Lakhan-Jo-Daro in Indus Civilization”

14:30-15:15　P. Ajithprasad “Excavations at Shikarpur, Gujarat 2010-11”

15:15-15:30　Break

15:30-16:15　Qasid Mallah “Locational Analysis of Two Indus Period Urban Centers of Indus Valley : the Chanhudaro and Nahuto ”

16:15-17:00　Jeewan Kharakwal “Summary of Results of First Phase Excavation at Kanmer, Gujarat, India”

17:00-17:30　Discussion

2011 年 8 月 8 日（月）

9:30-10:00　Atsunori Nakamura “Variability of the Asian monsoon as a potential candidate for decline of Indus civilization”

10:00-10:30　Kaoru Kubota “Mid Holocene climate reconstruction using oxygen isotopic composition of modern and fossil catfish otolith in North West India”

10:30-11:00　Hideaki Maemoku “Geomorphological constraints on the River Regime of the Ghaggar during Mature Harappan Period, Northwestern India”

11:00-11:45　Toshiki Osada “A summary of oral and poster presentations by our project members at AGU and EGU”

11:45-13:00　Lunch

13:00-14:00　Toshifumi Goto, Naoko Nishimura, and Chisei Oshima “Cows and bulls in Old Indo-Aryan

literature”

14:00-15:00　Shoji Ohta, Naoki Mori, and Hajime Chiba “The two ancient wheats, emmer wheat and Indian dwarf wheat, are still alive in India -their cultivation and utilization-”

上の参加者のうち、Nilofer Shaikh さんは学長再任が決まったため、来られなくなった。発表はマッラーさんが代わって行った。

8 月おわりには、今翻訳中の Dying Words の出版打ち合わせのためにオーストラリアに行く。この翻訳が出れば、地球研でも言語多様性の喪失こそが地球環境問題であるといった考え方を理解してもらえるのではなかろうか。

9 月にはコーネル大学で行われた Rice and Languages across Asia というタイトルのシンポジウムに参加した。これは遺伝学者（イネとヒト）、考古学者、言語学者が一同に集まって、ヒトとイネの伝播拡散、起源を議論する国際学会で、日本からは私と神戸大学のイネの専門家石井尊生さんの二人だけだった。なぜ私が推薦されたのかふしぎだったが、どうも後で聞いた話ではホイットマンさんが推薦してくださったそうだ。過去のヒトやイネの動きを学際的に扱う。テーマ自体はすばらしいものだったが、とても収斂するような方向性はなく、とくに言語学者の発言は学際的とはとても言いがたかった。

発掘報告会の様子

10 月には地球研の国際シンポジウムが行われた。このシンポジウムは毎年終了プロジェクトが中心となって行う。今年はわれわれのプロジェクトも参加することになり、一つのセッションを担当した。第 6 回国際シンポジウムのタイトルは "Beyond collapse: transformation of human-environmental relationship-past, present and future" である。われわれのセッションは "Beyond collapse: the case of the Indus civilization" として、二日目の 10 月 27 日の午前中行われた。出席者と発表タイトルは以下の通り。

地球研国際シンポジウムのポスター

Beyond collapse: the case of the Indus civilization

2011 年 10 月 27 日（木）

9:00-9:40　Yokoyama Yusuke "Paleoclimate during the last 10,000 years in Asia-Pacific region"

9:40-10:20　Weber, Steven "Decline of the Indus civilization and the role of agriculture"

10:20-11:00　Goto Toshifumi "Observations about arrival of the Aryas"

11:00-11:40　Osada Toshiki "Collapse or transformation? Beyond environmental determinism for the Indus Civilization"

今回のシンポジウムは川端プロ、窪田プロ、梅津プロのまったくことなるプロジェクトが一緒に行ったので、まとめるのが大変だったようだ。ただし、だれの責任でなんのために行うシンポジウムかがはっきりしないもので、これを続けていくのがいいのかどうか、真剣に考えるときに来たような気がする。

（文責　長田俊樹）

B　古環境研究グループの活動

古環境研究グループは 2009 年度出本格的な現地調査は終えたため、2010 年度は若干の補足調査と、データの分析や調査成果の取りまとめを中心に活動を行った。また成果の一部は学会等で発表を行った。2010 年 5 月 23 日～ 28 日に千葉市で行われた地球惑星科学連合 2010 年大会において、「ヒト - 環境系」セッションの一翼を担い、古環境グループが関係する発表を 8 件行った。10 月 16 日～ 25 日にはインド・ラージャスターン州にて砂丘の補足調査を前杢と下岡が行った。11 月 15 日～ 17 日にカトマンズで開催されたネパール地質学会において、2009 年度に同国西部ララ湖で採取した湖底コアの分析結果を中心に 2 件の研究発表を行った。2011 年 3 月 21 日～ 25 日に、「古気候・古景観・古代文明」をテーマとしたシンポジウム（アメリ

カ地球物理学会チャップマン会議）がサンタフェで行われ、古環境グループから 6 件の研究発表を行い、外国の研究者を貴重な意見交換を行った。2011 年度も 4 月 4 日～ 8 日に行われたヨーロッパ地球科学連合定期大会にて 2 件の研究発表を行い、2011 年 5 月 22 日～ 27 日に千葉市で行われた地球惑星科学連合 2011 年大会において、「ヒト - 環境系」セッションなどで、古環境グループが関係する発表を 4 件行った。2011 年 7 月にベルンで行われた国際第四紀連合の研究大会では、古環境グループの成果全体をとりまとめた研究発表を行った。
2011 年度後半には古環境グループで行った研究成果を各担当者が順次学術雑誌などに投稿する予定であり、これらの掲載をもって古環境グループの最終成果とする。プロジェクトは今年度で終了するが、次年度以降も、掲載された研究成果をもとにした一般向け図書の執筆や、インダス文明と古環境との関係を総合的に考察した研究論文を作成して、さらなる展開につなげて行きたい。

（文責　前杢英明）

C　生業システム研究グループの活動

生業システム研究グループは、遺跡から出土する植物遺物をもとにした古民族植物学的研究と現存の植物利用をもとにした民族植物学的研究を両輪として、インダス文明期の日常生活の復元と現代インドとの関連を明らかにすることを目的としている。日本人メンバーは、現存の作物種と雑草種を対象として下にあげる民族植物学的調査ならびに遺伝分析を行っている。

1）現存の在来作物の分布、栽培、利用についての現地調査と遺伝学的特性の解明
2）インダス遺跡周辺で現在栽培される作物種とその作付体系、および雑草植生の解明

現地調査

2010 年度ならびに 2011 年度は以下の 2 回の現地調査を実施した。

1）2011 年 3 月 4 日～ 3 月 11 日　大田正次、森直樹、千葉一：マハーラーシュトラ州とカルナータカ州の州境地域

昨年度の現地調査で森と千葉がインド矮性コムギの栽培を再発見した地域を中心に、その周辺地域でこのコムギの新たな栽培情報を得ることをおもな目的として栽培状況の調査を行った。マハーラーシュトラ州南部のマスワード、マルシラース、ビータ、ジャット、およびカルナータカ州北部のビジャプール周辺で聞き込み調査を行ったが、インド矮性コムギの新たな栽培を確認することはできなかった。昨年度の調査で栽培を確認していたカルナータカ州北部のマサビナーラ村で、栽培状況と利用などについてさらに情報を収集した。エンマー

カルナータカ州北部マサビナーラ村の
インド矮性コムギの畑にて

コムギについては、今回の調査地域でも数カ所でその栽培を見ることができ、栽培と利用についての聞き取りを行うとともに種子とさく葉標本を収集した。

2）2011 年 9 月 18 日～ 9 月 30 日　三浦励一、千葉一：カーンメール遺跡周辺地域

カーンメール村で祭礼と儀礼食の調査を行うとともに、アーメダバードなどで、穀物商、農家および市場においてこの地域で栽培される作物の聞き取り調査と種子の収集を行った。また、カーンメール遺跡周辺の野生および雑草植生の調査を行った。

成果公表

これまでの年度に得た研究結果を含めて、インダス・プロジェクト、ニュースレターに寄稿するとともに、おもに日本育種学会の講演会において随時発表している。

（文責　大田正次）

D　物質文化研究グループの活動

物質文化研究グループの活動内容は、以下に年次別に海外出張記録を列記する。

2010 年度

4/4 - 4/12　：宇野隆夫－インド（ウダイプル）
4/4 - 4/12　：寺村裕史－インド（ウダイプル）
4/20 - 7/5　：上杉彰紀－インド（プネー、ウダイプル、ローフタク）
4/20 - 6/24　：遠藤　仁－インド（ウダイプル）
7/4 - 7/11　：寺村裕史－オーストリア（ウィーン）
10/6 - 10/26：上杉彰紀－インド（バローダ）
12/3 - 12/15：宇野隆夫－パキスタン（カイルプル）

2011 年度

4/22 - 4/29　：寺村裕史－インド（ウダイプル）
8/21 - 9/4　：遠藤　仁－インド（バローダ）
1/16 - 1/29　：寺村裕史－インド（ブージ、ジョルパイグリ）

E　伝承文化研究グループの活動

E-1　インド学研究班

インド学研究班は、引き続き、ヴェーダ文献学、古典インドアーリヤ語文献学、タミル文学、現代インドの地域研究（文化人類学）などにわたり、研究、調査を進めている。基本的には各班員それぞれの研究を中心とするが、本研究プロジェクトによって「環境変化とインダス文明」という軸が与えられ、個別研究にも深化と普遍性がもたらされた。インド学の本プロジェクトへの貢献は、同時に、インド学がプロジェクトから与えられる発展の機会でもある。

文献に在証される動植物、生産技術、物品名など実生活の解明は、当時の生活環境の復元と、諸部族の動向、相互関係などの理解に欠かせない。古環境研究グループ、生業研究グループ、物質文化グループに情報を提供し、各グループの成果を取り入れて、インダス文明を取り巻く

環境を俯瞰的、歴史的に捉えるべく努めている。ヴェーダ文献に現れる穀物の同定等に関しては、特に、生業研究グループの千葉一氏の協力を得ている。

サラスヴァティー川とその他の河川に関する文献調査は本プロジェクトにとって重要課題の一つである。山田智輝（東北大学大学院）は最古の資料『リグヴェーダ』におけるサラスヴァティー、インダスその他に関する言及を網羅的に精査し、間もなくその成果を博士論文として提出する段階にある。「牛」と牛をめぐる観念はインダス文明期においてもその後のインドにおいても重要なキーワードである。大島智靖（京都大学人文科学研究所非常勤講師）と西村直子（東北大学専門研究員）とが古インドアーリヤ語（ヴェーダ語およびサンスクリット語）の文献資料を精査し、関連語彙を収集している。本年度末までには、後藤敏文も加わって成果を分析整理し、資料集として発表する予定である。西村直子は博士論文（『放牧と敷き草刈り －Yajurveda-Saṁhitā 冒頭の mantra 集成とその brāhmaṇa の研究－』、350 頁、東北大学出版会 2006 年）以来、祭式文献研究の基礎作業として乳製品の研究を進めており、平田昌弘准教授（帯広畜産大学、地域環境学研究部門植物生産学分野）との共同研究の機会をもちながら、ヴェーダ文献、仏典に見られる乳加工の実体を解明している。2012 年 1 月にデリーにおいて開催される第 15 回国際サンスクリット学会において、成果の一部を Processing of dairy products in the Vedic ritual、compared with Pāli と題して発表し、この機会を利用して、短期間、平田准教授とラージャスターン、パンジャーブの乳加工調査を予定している。西村は、2010 年 8 月トロントにおいて開催された世界宗教史学会（IAHR）において、アーミクシャーとパヤスヤーとよばれる乳加工製品の同定に関する発表（Fermented milk products in the Vedic ritual）を行い、2011 年 9 月末にブカレストで開催された第 5 回 International Vedic Workshop に招待され、ヴェーダ祭式の基本形とされる新月祭満月祭の主要供物として一般に信じられているものは後の定式化によることを指摘した : The Development of the New- and Full-Moon Sacrifice and the Yajurveda Schools: mantras、their brāhmaṇas、and the offerings。

後藤敏文は、引き続き『リグヴェーダ』のドイツ語訳に取り組み、最古の文献資料から得られる情報を提供すべく努めている。当該期間中には第 4 巻と第 7 巻とを翻訳、注解した。第 7 巻はインド・イラン共通時代の観念を色濃く残すことで知られており、インダス文明後期のインド・イラン諸部族、インドアーリヤ諸部族の姿を確認すべく努めた。地上の王プルーラヴァスと天女ウルヴァシーとの結婚とその後日譚は『リグヴェーダ』第 10 巻第 95 讃歌をはじめ、複数のヴェーダ文献に伝承されている。そこには、羊を中心とする女系社会とインドアーリヤ部族との間にあった過去の出来事の記憶が見出される。インド・イラン共通時代の諸部族は、インダス諸都市の文明をも包摂する紀元前 3 千年紀のユーラシア文化ネットワークに属する「バクトリア・マルギアナ考古複合」に遭遇し、この先進文化から社会制度や物質文化に関わる多くの要素を取り入れることによって次の段階へと歩を進めた。「プルーラヴァス王と天女ウルヴァシーの物語」はそうした過去の歴史を神話中に留めている可能性がある。それらの諸点への注解をも含めて、信頼できる資料を提出した :「資料 ヴェーダ文献に見られるプルーラヴァス王と天女ウルヴァシーの物語」、『愛の神話学』篠田知和基編、2011 年 3 月、435-480。2011 年 10 月 26 日から 28 日にかけて地球研が開催した RIHN 6th International Symposium “Beyond Collapse: Transformation of human-environmental relationships, past, present and future” においては Observations about Āryas’ migration into India と題して、紀元前 3 千年紀のユーラシア文化ネットワークの崩壊とインダス諸都市の消失、アーリヤ諸部族のインド亜大陸への侵出の背景を論

じた。上述のブカレストの International Vedic Workshop においては、A survey of some evidences for the development of Yajurveda and Brāhmaṇa texts と題して発表し、特に我が邦におけるヴェーダ研究の新しい諸成果を紹介することに重点を置いた。この学会の後、ドナウ河口地方を訪ねた。インド・ヨーロッパ語族が紀元前 5 千年紀にこの地方へ侵出したことが、同語族のヨーロッパ大陸全体への拡大をもたらす突破口となったと考えられるが、これに関する以前からの疑問に答えが得られた。また、ダキアがローマに併合される際、最後の拠点となったサルミゼゲトゥサ・レギアの遺跡を訪ね、デーヴァ博物館の新資料を特別に見る機会を与えられ、上記の RIHN の発表に活かすことができた。

文化人類学の分野では、松井健（東京大学東洋文化研究所）が 2011 年 3 月、これまでの研究を集大成して『西南アジアの砂漠文化。生業のエートスから争乱の現在へ』を同研究所から出版した。同書にはインダス・プロジェクトに生かされるべき所見も含まれるが、プロジェクトへの有機的取り込みは今後の課題である。

永ノ尾信悟（東京大学東洋文化研究所）は現代のヒンドゥー儀礼の諸要素をヴェーダ文献群から辿る着実な研究を続けている。上記ブカレストの学会においては Development of the Funeral Rite を発表した。高橋孝信（東京大学）はタミル語古典文献の研究を中心に、紀元後数世紀間の南インド社会の解明に努めている。藤井正人（京都大学人文科学研究所）はブラーフマナ、ウパニシャッド文献を中心に祭式と王権に関する研究を進めている。ブカレストの学会においては、The Sāmavedic Śākhā Backgrounds of the Jaiminīya-Upaniṣad-Brāhmaṇa and the Chāndogya-Upaniṣad: A Comparison と題する発表を行い、サーマヴェーダ学派のウパニシャッドの学派帰属と文献名の問題を写本伝承に基づいて論じた。堂山英次郎（大阪大学）はヴェーダ文献とイラン語文献の精密な理解に向けて取り組みを続けている。上記ブカレスト学会の招待発表では Kṣetrasya Pati and Mandhātar という題目で、インド・イランの社会制度とも関わる興味深い発表を行った。Asko Parpola（ヘルシンキ）はインド文献学、考古学、ユーラシア研究その他に亘って、相変わらず精力的な発表を続けている。ブカレスト学会における発表題目は The ritual authorities and Vedic schools and texts quoted or referred to in the Jaiminīya-Śrautasūtra というものであった。

（文責　後藤敏文）

E-2　言語研究班

言語研究班は、2010/11 年度も、「インダス言語研究会」と「言語記述研究会」の二つの研究会を中心に、活動を続けた。また、各メンバーは、南アジアの言語や基層文化の研究をめぐるそれぞれのテーマに沿って、インド、イラン、ネパールで調査を行った。

「インダス言語研究会」は、*Language Atlas of South Asia* (LASA) の地球研版およびハーヴァード大学版の作成と、南アジア諸言語の専門家による文法記述についてのセミナーが活動の中心であった。LASA の地球研版は 2010 年 7 月に出版され、その改訂版のハーヴァード大学版はすでに編集作業が終わって、2012 年 3 月に出版される予定である。また「言語記述研究会」では、若手のメンバーの発表を中心に、さまざまな言語の記述分析をめぐる議論を積み重ねて来た。そうした研究活動の成果である『地球研言語記述論集』の、第 3 号を 2011 年 3 月に出版、現在第 4 号の出版（2012 年 3 月予定）に向けて精力を傾けている。

【インダス言語研究会】

「インダス言語研究会」は、長田俊樹、大西正幸、森若葉、児玉望、高橋慶治、北田信の 6 名が中心メンバーで、それに加えて、LASA の作成のため、物質文化研究グループの寺村裕史と研究助手の稲垣和也が随時参加した。会合はほぼ 2 ヶ月に一度のペースで開かれた。メンバー・参加者の専門は下の通りである。

長田俊樹（ムンダ諸語、インド＝アーリヤ諸語、記述言語学、言語類型論）
大西正幸（インド＝アーリヤ諸語、記述言語学、言語類型論）
森若　葉（シュメール語、文字論）
児玉　望（ドラヴィダ諸語、音韻論、記述言語学）
高橋慶治（チベット＝ビルマ諸語、記述言語学、言語類型論）
北田　信（インド学、文献学、インド＝アーリヤ諸語）
寺村裕史（考古学、文化財科学、GIS（地理情報システム））
稲垣和也（記述言語学、オーストロネシア諸語）

研究会では、それぞれが専門とする言語の文法記述や基層文化研究に関する発表や、南アジアの言語の記述を専門とする他の研究者を招いたセミナーなどを行った。また、2010 年度の前半は LASA（地球研版）出版のための原稿の検討、また 2011 年度の 8 月から 11 月にかけては LASA（Harvard UP 版）出版に向けての地球研版の改訂作業に、時間を費やした。

また、研究会活動の一環として、2011 年 7 月 9-10 日に、言語記述研究会との共催で国際シンポジウムを開催した。

20010 - 2011 年度に実施した研究会は、以下の通りである。

第 17 回　2010 年 5 月 8 日（土）
LASA（地球研版）原稿の検討

第 18 回　2010 年 10 月 30 日（土）
研究発表：北田信　「ネパール・インド調査報告」／「中世ベンガル語の韻律」

第 19 回　2010 年 12 月 11 日（土）
研究発表：ディリプ・チャンドララール「シンハラ語の項構造」

第 20 回　2011 年 1 月 22 日（土）
研究発表：小林正人「マルト語文法」
　　高橋慶治「キナウル語動詞形態論」

第 21 回　2011 年 3 月 1 日（土）
研究発表：峰岸真琴「非階層的統合分析の試み：タイ語を例に」
LASA（ハーヴァード版）原稿の検討

第 22 回　2011 年 5 月 21 日（土）
研究発表：桐生和幸「ネワール語の文法の概略とネワール語の Conjunct/Disjunct 体系」
LASA（ハーヴァード版）原稿の検討

第 23 回　2011 年 6 月 4 日（土）
LASA（ハーヴァード版）原稿の検討

第 24 回　2011 年 7 月 9-10 日（言語記述研究会との共催）
Workshop on Austroasiatic and Austronesian Linguistics
インダス言語研究会／言語記述研究会関連の発表：
7 月 9 日
Ganesh Murmu and Masato Kobayashi: 'Kera' Mundari – a creole with Dravidian substratum'
Makoto Minegishi: 'A presentation on semantics and syntax of verb in Thai and Southeast Asian languages.'
Yuma Ito: 'Is Mlabri in the process of becoming a tonal language?'
7 月 10 日
Gerard Diffloth: 'Higher branching of AustroAsiatic and the place of Pearic.'
Toshiki Osada: 'Grammatical outline of Mundari'

第 25 回　2011 年 11 月 27 日（日）
LASA（ハーヴァード版）原稿の検討

なお、2011 年 2 月 27 日には、プラサント・パルデシ（日本語学研究所）等を招いて、インド諸言語の文法記述をめぐる研究会を開催することを予定している。

【言語記述研究会】
「言語記述研究会」は、長田俊樹、大西正幸、森若葉の他、少数言語の記述を専門とする若手研究者が主要メンバーである。この研究会は、2007 年 4 月より、毎月 1 度のペースで開かれ、言語記述の方法論や言語類型論をめぐる議論を積み重ねてきた。若手のメンバーが年々増え、ホームページも充実してきた。2011 年度末には、昨年に続き、大西と稲垣の共同編集による『地球研　言語記述論集 3』を刊行。現在、最終巻となる論集 4 の編集作業に入っている。
2010/11 年度に実施した研究会は以下の通りである。

第 27 回　2010 年 4 月 14 日（水）
研究発表：千田俊太郎「シンブー諸語サブグルーピングの根據に關する檢討」

第 28 回　2010 年 5 月 19 日（水）
研究発表：千田俊太郎「近い方言の分岐 : シンブー諸語のトーン變化から」

第 29 回　2010 年 6 月 16 日（水）
研究発表：鈴木博之「ニャロン・ムニャ語の能格標識が果たす役割」

高嶋由布子「東アジアの味ことばとその意味拡張：中国語貴州方言、プイ語、日本語を例として」
松本亮「エヴェンキ語の agreement について」

第 30 回　2010 年 7 月 21 日（水）
研究発表：伊藤雄馬「ムラブリ語の諸問題」
倉部慶太「ジンポー語の対句表現」
仲尾周一郎「ジュバ・アラビア語のプロソディ」

第 31 回　2010 年 10 月 27 日（水）
研究発表：寺村裕史・稲垣和也「GIS（地理情報システム）を用いた方言分布の地理的分析
―南ブーゲンヴィル、ナゴヴィシ・シベ語の方言地図―」(1)
野島本泰「ブヌン語（南部方言）の人称代名詞について」

第 32 回　2010 年 11 月 24 日（水）
研究発表：千田俊太郎「ノマネ地區の諸方言クナナ・クの言語についての豫備調査報告」

第 33 回　2010 年 12 月 25 日（水）
研究発表：倉部慶太「ジンポー語の対句表現」
白田理人「琉球語喜界島上嘉鉄方言の簡易文法」(1)
中澤光平「淡路島方言における助詞「が」、「は」の融合形について」
『地球研言語記述論集 3』の各原稿の検討

第 34 回　2011 年 1 月 19 日（水）
研究発表：稲垣和也・寺村裕史　「GIS を用いた方言分布の地理的分析：南ブーゲンヴィルのシベ（ナゴヴィシ）語の方言地図」(2)
仲尾周一郎　「現代若年層ジュバ・アラビア語についての予備的報告」
白田理人　「琉球語喜界島上嘉鉄方言の簡易文法」(2)
『地球研言語記述論集 3』の各原稿の検討

第 35 回　2011 年 3 月 9 日（水）
『地球研言語記述論集 3』の各原稿の検討

第 36 回　2011 年 5 月 18 日（水）
研究発表：大竹昌巳「孤立化・モンゴル語化したダグール語について ― 主に音韻に関して」
野島本泰「ブヌン語の「品詞分類」を再考する―特に「形容詞」の位置づけについて」

第 37 回　2011 年 6 月 8 日（水）
研究発表：倉部慶太「ジンポー語の祈願文の 2 つの意味とその統語的特徴について」
大西正幸「ナーシオイ語民話テキスト」

第 38 回　2011 年 7 月 13 日（水）
研究発表：ジェラール・ディフロス「国際カンファレンス Austroasiatic & Austronesian Linguistics について」
仲尾周一郎「ジュバ・アラビア語の焦点化構文と文法化」

第 39 回　2011 年 9 月 30 日（金）
研究発表：千田俊太郎「朝鮮語の「媒介母音」と音節構造、形態分析」

第 40 回　2011 年 11 月 9 日（水）
研究発表：大竹昌巳「ダグール語Ｘ方言のピッチパターンについて」
倉部慶太「ジンポー語民話資料」

（文責　大西正幸）

F　DNA 分析研究グループの活動

DNA 分析研究グループの活動内容は、以下に年次別に海外出張記録を列記する。

2010 年度

2/20-2/27：斎藤成也－インド（国立生物医学ゲノム学研究所、デカン大学）

2011 年度

なし